

## 子どもの力・親の力に支えられてその一

### — 東村山市幼児相談室 —

馬場教子

その地域に生まれた子どもなら、小学校に入学するまでの六年間、育児上心配だと思われる「あらゆる相談」に応じてもらえる、そんな「夢のような窓口」が三十年も前から開かれている東村山市幼児相談室。その子育て支援の先進的な取り組みは、「心身障害児に対する地域ケア」を求める地域住民の切なる要望に応じて出発したという。そして、昭和五十二年五月に、画期的ともいえる「地域ケアの理念」に基づき、①育児上の心配を抱える親・子に対し地域福祉を提供する身近な窓口として、②地域内外にある幾多の社会的・人的資源を有機的に連

結し、それぞれの機関と連絡を取りながらその機能を補充しようとする、幼児相談室が開設された。あくまで市の単独事業であり、公設民営の形態をとっている幼児相談室は、現在、常勤四名と非常勤二名の日常的な職員体制に加え、職員の不足なところを補充する役割が必要に応じてお願いできる専門相談員十名を擁し、援助の内容と方法は非常に多岐に渡っている。(註)

今回から二回に分けて、幼児相談室で長年、親子の相談に応じてこられた馬場先生のお話を紹介したい。

(インタビュー 平成十八年六月十七日 首藤美香子)

——馬場先生は、実際、どんな相談に応じてこられたのでしょうか。かかわったケースから、差し支えないものをご紹介します。

馬場 では、「赤ちゃん返り」をしていたAちゃんのケースを話します。Aちゃんは、どちらかというところ、ちよつとしゃべり過ぎぐらいに、お口でいろいろなこと言える、お利口なお子さんでした。感情表現よりも、理屈が先に立つようなタイプというか……。

——自分の感情を理屈でコントロールして、大人にわかる形で見せてくれるけれども、本当のところは本人もわからないし、大人にもわからない。

馬場 そうだと思います。そういうお子さんだということとは、おそらく母親も多少そういう傾向があると思うのです。この母親は、子どもが小さくても「言って聞かせる」とか、「説得する」といったかかわり方をしてきました。「赤ちゃん返り」についても、頭では理解できているから、「本人の気持ちも尊重しなくてはいけない」と思っているのです。幼稚園の先生も、その親子の気持ちに寄り添おうとしてくれました。そんな中、A

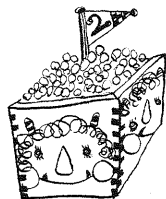
ちゃんが、幼稚園でけがをしたのです。

口の中を切ってひどく出血して、鼻血もたくさん出るようなけがで、みんなもびっくりしました。先生が「病院に行こうね」と言うと、本人は「行かない！」。その場に居合わせた母親も「行こうね、行かない？」と説得しようとする。本人が「行く」と言ったら、もちろん行こうと思っているんですけど、「行かない！」と言いつ張る。そうこうしているうちに二十分、三十分と過ぎ、打撲だから患部がどんどん腫れてくる。そうすると今度母親は、本人に鏡で一生懸命顔を見せて、「ほら、こんなになっちゃったんだよ、だから病院に行こうね」と言うけれども、それを見るとAちゃんはますます……。

——怖くて現実を受けとめられないから、ますます行きたくなくなる。

馬場 そうでしょう。だから、ダーッと園内を走り回ったりするぐらい嫌がつて、「行かない、行かない」と言っている。それで一時間ぐらい過ぎて、母親はそのままAちゃんをうちに連れて帰った。

そして、「お食事を何か作ってあげたいけれども、どんなものを食べさせてあげたらいいかわからないから、病院に行こうよ」と言



うと、しばらくして納得した。それでも病院に行つてAちゃんは暴れて手こずつたという話を、母親がずっとするのです。

聞いているとだんだんつらくなつてきて……。Aちゃんがけがをした時、周りに大人がたくさんいたわけでしょう。その中の一人でも、抱えこんで、無理にでも病院に連れて行こうとしなかったのか。誰も悪気はない、善意で親子の成り行きを見守っていたのでしょうけれど。

——今の世の中、周りの人間は、母親の意思を尊重せざるを得ない部分もありますね。

**馬場** そう。でも私は、お話を伺いながら、まずAちゃんの母親に「そんなふうにはやっちゃいけないかった」という印象をもってもらいたくなかったのです。

——そういう場合、母親にどう声をかけられるんですか。難しいですね。

**馬場** 難しいです。Aちゃんは、その後も、おうちの中ですごく荒れているのです。妹さん（Bちゃん）にも暴力をふるったりして、両親は本当に持て余してしまつた。「お寺さんにでも預けて治してもらわなければ、この子はもう治らない」というぐらいの気持ちになつて、ご夫婦で悩んで、「何でそんなにわがままで、勝手なんだ」「Aちゃんをどこどこにやろう」と言つて電話をかけるふりをした。そうしたら、まだ二歳ぐらいの幼いBちゃんが泣きながら四本指を立てて、何か言つて訴えて（母親には「そんなことやっちゃだめ、四人でひとつの家族じゃないか」と聞きとれて）止めたというのですね。当のAちゃん本人は、母親が言うには、そんな場合でもけろつとしていたということです。

妹さんは幼いけれど、ある意味では一番真つ当な反応をしているでしょう。そこにきて、初めて母親に私から問いかけました。「その妹さんが感じたものは何だつたと思う?」「パパとママの異様な雰囲気、お姉ちゃんはまるで何ごともなかったかのような表情をしている、この場の異様な雰囲気を感じたんじゃないかしら」と。

——ああ、そういうふうに入っていくのですか。今までたくさんさんのケースをご経験だと、話を聞いた段階で、このあたりに原因がありそうだとか、ここの関係を立て直す必要がありそうだということはわかりますよね。その先を、そのケース、相談される方、お子さんに合わせて、どうかかわっていくか、とても難しいと思うんですよ。

今の話を聞くと、私でも中途半端な知識から原因は何か、解釈はできそうに思えます。けれども、それから先、母親自身が自らがついて、問題解決に向けて動いてくれるように働きかけるには、どんな努力をなさっていますか。

馬場 まず母親に、「あなたがやっていることがダメなんだ」というふうに感じさせたらいけない。それは、母親の自信がなくなるからです。生き生きしなくなりますね。その面接場面で、「そうか、この次はこうした方がいいんだ」と、正しいことは習うかもしれない。ただし、ケースでは、「こういうことがあります」という話をしていただきますよね。それは結果論なわけだから、

ら、「結果として、あなたのやったことはダメだったんですよ」という解説になったのでは、最初に自分に対してマイナスの評価を感じてしまうでしょう。そうすると、次の場面に出会う時に、母親は固くなって緊張は増えると思うのです。

お話しされている間、私もどうしようかなと思いがら聞いていて、Bちゃんの非常に自然だけれど、問題の本質をつく反応を、まず母親にも一緒に感じてもらいたかった。「小さい子が感じ取ったものってすごいでしょう」と。それから、子どもが顔中出血するほどのけがをしたのに、周囲の大人は「まず病院」と動かなかったことは、「Aちゃんをよりしつかりさせる方向に動いてしまふ大人の働きかけになっているような気がした」というふうに言ってみました。「Aちゃんは、その時は一番動転して、人に助けってもらおう側よね。そうしたら、しつかりさせる方向とちよつと違ふんじやないかな」、私はそういうふう感じたというようにです。

そう考えると、Aちゃんが走りまわって逃げたり、「嫌だ嫌だ！」というのは、「大混乱してすごく怖がっ

ていたんじゃないか。そんな中で病院に行くか行かないか子どもに決断を委ねることは、Aちゃんを『頑張ろう、頑張ろう』という方向に追い詰めてしまう気がした」というようなことを言ってみました。そうしたら、母親のほうで、「はあ」と、当惑しながら、その後のAちゃんの行動を想い起こして、表面に出ている行動とその裏にある子どもの訴えについて、気持ちが傾き始めていきました。

そこでまた、「子どもが感情をわーっとぶつけた時に、母親が壁になってくれないで、ふわっと壁が動いちゃったら、子どもにはもつと怖いかもね、けがをした時はそんな状況だったんじゃないかな」と、私自身「こう思うけれども」ということを伝えてみます。そうすると母親が何か思いついて、別の場面ではこうだったんですと話してくれます。

その中で、いい話があった時に、「それはいいね」「それだとお子さんのほうが母親に自分の本音を表現して、母親も本音のほうにつき合っている感じがする、それはすごくよかつたんじゃないかな」と返します。そうする

と、母親自身も「それでよかつたんだ」と実感するから、「ああ、子どもと向き合うってこういうことなのか」と思ってた帰ってくれます。

——親御さんの理解をなかなか得られないケースはありますか。

**馬場** それはもちろんこちらの力量不足です。この相談室で一番大事にしているところは、こういう相談の場に初めて来たという人が多いので、「お子さんのことで誰かと相談するということはいいいものだった」と思って終わってもらいたいことです。というのは、お子さんは小学校、中学校と、どんどん大きくなって、いろいろな人間関係に出会います。その時々、「誰かに相談をする」とよいことがある」「とにかく相談に来てよかった、話してよかった」という原体験になってもraitたい。解決はなかなか難しいことも多いのですが。

ここの相談室でもうひとつ大事にしていることは、「お子さんのもって生まれた力を十分に發揮できるように」ということと、「家族が、ご自分らしい育児ができる」というお手伝い」です。私たちはあくまで黒子なの

で、ご自分で「自分らしい育児が見つけれられた」と思っ  
て卒業していかれるのが一番です。

のんびりしているお母さんに、てきぱきした育児はと  
ても難しいし、黒白つけたようなタイプのママに、  
「のんびり、どちらでもいいんじゃない？」というよう  
な育児を望んでも、それは苦しいばかりです。その方の  
持ち味があると思うんですよ。AさんならAさんが、自  
分への自信みたいなもの、「私はこれでいい、自分で自  
分が認められて、私は結構いいところがあるな」と思え  
ると、工夫がだんだんできるようになる。私たちの仕事  
は、一人ひとりに、「私は私でいいんだ」というふう  
に思っていただけということが、一番の基本だと思っ  
ます。

〈次号へ続く〉

(東村山市幼児相談室)

#### 註 東村山市幼児相談室「援助の内容・方法」

①相談室での援助。母親へのカウンセリング、子どもへの何ら  
かの個別の心理治療的アプローチ。あるいはグループワーク。  
心理的、発達の診断。顧問医師（小児神経・児童精神科）によ

る医学的診断と指導、経過観察。

②家庭訪問、電話相談。どうしても通所できない場合に行う。

③保育園、幼稚園でのコンサルテーション。

④進路に関する情報提供と援助。これは単にどこにどういう学  
校、保育園、療育施設などがあるかという紹介にとどまらず、  
ケースが確実にその機関に定着するまで援助を続ける。

⑤医療機関の紹介。ケースにとって必要なら受診をすすめ、適  
切な機関につなげる。また、紹介して終わるのではなく、結果  
に関しても把握する。

⑥福祉の諸制度等に関する情報提供と利用までの援助。

⑦複数の関係機関が援助している場合、ケースの混乱を防ぐた  
めに、ケースの了承を得て、お互いの役割を調整して、分担す  
るべくキーパーソンとなる。

⑧家族のライフステージに応じて、適切な資源を利用し続けられ  
るような関係機関の連携を日常的に図っておく。

これらの援助を個々のケースの必要に応じて行う。したがっ  
て、援助の内容、方法、密度などはその必要性によりケースご  
とにすべて異なる。

(馬場教子提供の『東村山市幼児相談室 概要』より)